

## 随 想

## 日 本 の 印 象

J. K. Brimacombe\*

日本を初めて訪問して以来、あつという間に時が経つた。何週間と思つていたのが何ヶ月ということになりとうとう1年経つてしまった。この一年、三週間の訪問を想い起こして、皆様にも共にわかち持つていただきたいあの訪問の印象を深める機会が与えられた。

私はいくつかの関心から日本を訪問したいと思つた、研究という面からは、企業や大学の研究室を訪れて研究の考え方、方法、長所や短所を知りたいと思つた。当然、私はその活発な仕事振りに関心を持ち、日本の研究者に私共のやつているガスインジェクション、連続鋳造、鋳造組織の制御技術やロータリキルンの操業などについての考え方をぶつけてみたいと思つていた。さらに個人的なところでは、川崎製鉄の反町謙一さんのような以前の共同研究者の方々や、東北大学の森康男教授、現新日本製鉄の不破教授のように昔、北米で会つたことのある方々と旧交を暖めたいと願つていた。そして、実は世界旅行を趣味としている人と同じように、私は短期間であつても可能な限り日本の文化、習俗、伝統に触れてみたかつた。

私の訪問は主として森康男教授のお蔭で大変うまくいつた。彼は私の旅程を心をこめて作りそして多くの時間を割いて同行してくれた。私の訪問がうまく行き、私が大変満足できたのはひとえに彼の親切、心づかいと人柄のお蔭であつた。

確かにこの旅行は川鉄・新日鉄・神鋼及び大同の研究所や工場、同じく東北大・阪大・名大・京大の訪問を含めてとりつかれたような旅であつた。加えて私は三菱金属直島工場に連続製鋼を見に行き、また凝固プロセスに関する学振の凝固現象協議会にもちよつと顔を出した。だが仕事だけばかりでなく、私は東京見物、福中博士とともに京都・奈良・東北観光を楽しみ、別府では旅館に泊つて静かに夜を過ごしながら心くばりの行き届いたご馳走と余興を楽しむことができた。

日本の印象で最も深いのは“人々”である。私は企業における教育と研修に注がれている努力を見て心を打たれた。毎日、このことが心を離れなかつた。たとえば、多くの研究所で夕方になるまで私と日本の若い研究者との研究討論会が設営された。しばしば若い研究者は自分達の仕事について短かい発表をすることになつており、私は彼らの所見と結論を簡潔に論評するように求められた。このようなことは大学教師にとっては死んで天国に

行つた方がましである。私達すべてにとつてこの教育体験は刺激的であり、少なくとも私にとつては心たかぶることであつた。若い研究者達は英語で発表し私の問いに英語で答えることになつていたが、私の方はいまだかつてなかつた程急いで研究一つ一つを検討しなければならなかつた。このような研究会がどこでも設営されるという事実は、日本の経営者が社員の教育に熱心であることの証しのように私に思えた。

教育のレベルともう一つ言えばやる気のレベルの高さが一般的に研究者や同様に作業員との普通のやりとりにおいてもよくわかつた。言うまでもなく、日本のような家父長制社会においては、人々がめつたに仕事を変えないということを知つている。それ故に、ある人に教育と経験とを与えても決して他所に移つてしまわないと信じて彼を向上させようとするを比較的気楽に行うことができる。しかし、それにしても、教育と研修とをあんなに精力的にするのを見ることは驚きである。優れた人々が協力すればすべてが旨く行くのは当たり前である。現代の技術の水準はそれを用いる人間のレベルで決まってくる。北米をはじめ世界の他のところで、このことが十分重んじられて来なかつたというのは一つの問題である。

大学に行つて、私は種々の研究を幅広くやつている献身的なスタッフや学生にも会つた。金属各社が自前の基礎研究所を携しているの、例えばカナダに比べて見て応用研究を大学に頼る必要も産学協同の必要も小さいということは当然である。これは産業にとつても大学にとつても一つの問題であるに違いない。産業にとつては教育プログラムを自前で持たなければならなくなるし、大学にとつては実地の問題からなおさら遠くへ追いやられてしまうことになるからである。

日本の大学制度に私は関心を持つた。というのは私は日本の大学が教授-助教授-講師-院生他という個々の単位の集まりからなるドイツ流の方式であるということを知つたからである。人間がそんなに自由には職場を変えないような日本の社会において、かなり厳格なピラミッド構造の制度がうまく行くのかということ私には必配している。日本の大学制度を、より自由で若い助教授がきめられた研究グループの外に出て独立して研究している北米の大学制度と比較して見ると面白い。ここでは、もし助教授がよい院生とお金に恵まれれば、それ程活発でなくなつた教授と同じ程度の権力を学科の中で発揮することができる。すなわち、仕事が地位よりも優先するのである。日本から帰つてから、私は若い人が30代なかばであるとして、あの固い大学制度の中で独自の研究方針を発展させようとし、また創造性を豊かに働かせるにはどうしたらよいのだろうかと自らに問いかけている。

原文は本会にて保管、訳：木原諄二（東京大学工学部 工博）

\* Stelco Professor of Process Metallurgy, The University of British Columbia

私には分からないが、私には制度が自由の方が好ましい。私にとっては、大学での一番大切なことは創造性であり、したがってそれには自由が必要なのだ。

いろいろの研究所や製鉄所へ出かけた時に、技術の水準やその進展速度を見てかなり感じる場所があつた。人々が研究に、技術開発に、操業技術に、さらにその努力の集約に献身的に従事して、研究成果がとどこおりなく研究室から工場へと移つていくのを見て素晴らしいと思つた。これは、一つにはよく人々の研修が行き届き、やる気を持っていること、管理がよいことのあらわれである。北米で我々はこのことについてもつと学ばなければならない。私は、研究所の設備、きれいな工場、工場を効率よく動かす作業者の熟練・やる気・献身の姿を忘れることができない。

筆を置く前に、私は日本訪問の期間中受けたご好意、

ご配慮とご親切のお礼を申し上げなければならない。技術討論・工場見学・夕食のご招待のどれを問わず、各段階で私は招待状をいただいて行動することになつた。これは全く驚くべきことであつて、たくさんの人々が技術について討論し、大へん効率のよい工場をこの目で見ようと日本の会社に押しかけている現状の中でしていただいたからである。(私は冗談に、日本の友人達にこう話した。日本にたくさん訪問者を送つて、見学・討論・会食のあと鉄を造るひまを与えないようにして、日本人が鉄を製造できないようにする国際謀議をこらしたらどうだろうと。)大学を訪問した時も、大学の仲間達は行き届いた心くばりをしてとても親切に迎えてくれた。

かくして私は初めての日本訪問について胸の熱くなるような想い出を抱いてカナダに帰つた。そしてすぐにもまた出かけたものだと思つている。

## コ ラ ム

### 筑波の不思議な道

国家的事業である研究学園都市の建設もほぼ完了し、科学万博がなければ近くに住む建設母体の住宅公団職員家族が去る時期になつた。周囲の民有地に次々に住宅が建てられ、街が日増しににぎやかになつていく。中心地区では6車線道路と高層、低層とりどりの宿舍群が外来者に「リトルアメリカ」の印象を与える。街路樹は県庁のある水戸より多いという緑の新都市である。しかしながら、この人工都市は外見ほど住みよい街ではない。道路交通もその一つである。都市設計者が他にあまり例のない街作りの実験を試みたためである。

「筑波」では大通りの交通の流れを考えて、交差点が350mごとにしかない。また大通りから直接沿道の商店や住宅に入ることはできず、一たん裏通りに入つて戻ることになる。大通りに沿つては広い植栽帯と自転車道がある。その結果、大通りが交差する交差点にある鮎屋へ車で入ろうと思ふ客は、しばし途方にくれた後、一つ先の裏通りとの交差点まで行き、そこにある

ライバル店の脇を通つて来なければならない。問題解決を急いで植木をなぎ倒して大通りから進入する車も現れる。そこには道路利用者の特異な街作りに対する戸惑いを感じられる。広い裏通りには信号が少ないが、そこにも対向車の動静が直前までわからない変則Y字路が多用され、右折のたびに危険な思いをさせられる。

筑波は東京に比べて車が少なく、自転車を快適に乗りまわせる環境にある。しかし自転車専用道(緑道)は上下の起伏が多いことがきらわれ、もつぱら裏通りの車道を走る人が多い。これなどは「人間は少しでも安易な近道を選ぶものだ」という習性を忘れた結果であろう。歩道の段差や四輪車進入止め柵にも自転車への配慮の無さを感じる。

最近筑波で交通事故が多発している。この中には東京では発生しえない「大通りのスムーズな流れ」の中の事故のほか、都市作りの欠陥によると思われるものが目立つのである。

(金属材料技術研究所 古林英一)